



2029 年度 準備開始

今月末までに今年度の採用試験の結果が出ます。次年度を志すみなさん！いよいよ準備開始です。

2028 年度教員採用試験 傾向

2028 年度教員採用試験（27 年度実施）から導入予定の第一次選考共同筆記出題方針が発表されました。



どこの自治体が実施予定でしょうか。

京都府や奈良県など 51 自治体です。希望する自治体を調べてみましょう。
首都圏の自治体は、独自作成の方針です。



明らかにされた出題方針と問題構成とは？ 共同実施に限定されず、多くの自治体の試験に波及されると考えられます。

【出題方針】一般教養：地方公務員採用試験の上級に相当するレベル

教職教養：教員資格認定試験の出題基準に準拠

教科専門試験：教師として必要な専門知識に加え、学習指導要領の理解や具体的な指導法を問う
出題を想定

【問題構成】教養試験：一般教養（人文・社会・自然分野、数的推理等）10 問程度＋教職教養 30 問程度

【文科省初等中等教育局教育職員政策課見解】今回の出題方針の提示について、は「初年度は過去問題が存在しないため、受験生にとって試験のイメージがつかみにくいという課題があったが、既存の試験に合わせたことで、その点は一定程度、解決できたのではないかと説明。その上で、**「単なる知識再生型ではない、思考力・判断力・表現力などを中心に問うような試験問題となることを期待している」**

では、対策

本学のみなさんの多くは、所属学科が受験科目の専門性と一致していませんが、多面的な知識と見識を持ち、柔軟な思考が可能であり、探究的な学習の手法を獲得している強味があります。一方、専門教科担当者として考えなければならない事もあります。次の対策を教科として考えください。



【対策 1】解けることと教えること、わかっていることと導くことは違います。教科書を教えるのではなく、教科書で教えます。（最初はここからです）教科書の内容配列、問題構成の仕掛けを知ることから、どのように知識を獲得させ、何を判断材料として思考させ、いかに言語能力を鍛えながら課題解決をさせていく方法を導き出していくか。教師として考えることが必要です。



【対策 2】「好き」（興味・関心）を育み「得意」を伸ばすは、次期学習指導要領の方向性（参照 NO.8 「こがねい」）でも、現在も各教育委員会の教育振興基本計画でも挙げられています。

「好き」（興味・関心）を育むのです。つまり、どのようにして「好き」は芽生えるのでしょうか。

“伸ばす”ための授業の方策に終始してしまう傾向があります。世の中高生の多くは、興味・関心に対し五里霧中であったり、虚無感さえ持ってしまう時があります。最初の“きっかけ”づくりはどのように仕掛けますか。



【対策 3】理論の根拠を明確にする必要があります。PISA2025 の結果が公表されました。

ここでも、「好奇心」項目が注目されています。質問項目に、対策 2 を考えるヒントがあるかもしれません。詳細は次ページです。



PISA2025の結果概要（日本）

- 調査開始以降初めて3分野全てでOECD加盟国中1位。世界トップレベルを維持。今回、初めて実施したラーニング・イン・デジタルワールド※もOECD加盟国中1位（全参加国・地域中では、科学コンピテンシー5位、読解力4位、数学的リテラシー5位、ラーニング・イン・デジタルワールド4位）。
- ※ICTを活用した自律的な学習（自己調整学習）のプロセスを通して、問題解決し、その中で新しい知識を獲得する能力。
- 2015年以降、OECD平均は平均得点が低下しているが、日本は横ばい（平均得点のトレンドに有意な変化がない）。
- 日本は3分野全てで国際的に高い水準を維持し、一貫して社会経済的公正性が高い。一方、低得点層の割合の上昇といった課題も見られた。OECDは、生徒の学びについて、学習への関与（好奇心、忍耐力、自己調整）、学校や家庭からの支援、安全で公正な学習環境なども含め、多面的に捉えることの重要性を示唆。

平均得点・習熟度レベル別割合の変化

- 平均得点は、前回調査から読解力が有意に低下※（－13点）（OECD平均は、読解力（－15点）、数学的リテラシー（－9点）が有意に低下）。
- ※「読みの流ちょう性（速く正確に読む）」の設問の正答率は、有意に低下（OECD平均も有意に低下）。一方、「評価し、熟考する」に関する設問の正答率は、有意に上昇（OECD平均は有意に低下）。比較的に長い課題文や複数の課題文がある設問、「情報を探し出す」「理解する」に関する設問の正答率は、前回調査と同程度（OECD平均は有意に低下）。
- 3分野全てで低得点層の割合が有意に上昇。高得点層の割合に有意な変化はない（OECD平均は、読解力と数学的リテラシーについて、低得点層の割合は有意に上昇し、高得点層の割合が有意に低下）。

分野名	平均得点の有意差（2022年比）		習熟度レベル [※] の有意差（2022年比）	
	日本	OECD平均	日本	OECD平均
科学コンピテンシー （中心分野）	低下したが有意差なし	低下したが有意差なし	3分野全てにおいて、 低得点層の割合（習熟度レ ベル1以下）は有意に上昇、 高得点層の割合（習熟度レ ベル5以上）は有意差なし	低得点層・高得点層ともに有意差なし
読解力	有意に低下	有意に低下		低得点層は有意に上昇、高得点層は有意に低下
数学的リテラシー	低下したが有意差なし	有意に低下		低得点層は有意に上昇、高得点層は有意に低下

※PISA調査では、生徒がどのような課題に対応できるかを示すため、平均得点に基づき習熟度レベルを設定している。レベルが高いほど、より複雑な状況において知識や技能を活用し、推論や問題解決を行うことができることを示し、レベル2が基礎的な習熟度レベルとされている。またレベルの段階は各分野によって異なり、読解力及び数学的リテラシーはレベル1c未満から、科学コンピテンシーはレベル1b未満から、それぞれレベル6以上まで設定されている。

【課題】 日本が、肯定的回答の割合が OECD 平均よりもおおむね低い項目

「好奇心」「学習の自己調整（目標設定）の頻度」「学校への所属感」、

「学校内外でのデジタル・リソースの利用頻度」

「学校を出た後の社会人としての生き方については、あまり教えてくれなかった」「学校なんて時間の無駄だった」設問に対して否定的回答の割合、

「家庭による支援的な関わりの頻度」指標

学習の自己調整（目標設定）の頻度



「調査項目：デジタル機器・AI の活用について」
学校における AI の使用頻度と成績の関係性について、
学校で、AI によって生成された情報の質を評価すること
を学ぶ機会があり、かつ、AI を学習の助けとして適度に
利用する生徒は、そうでない生徒に比べて、科学コンピ
テンシーの平均得点が高い傾向にあります。
しかし、AI の信頼度の見極め等、使用に関する課題は多
いのです。

新学習指導要領では、
「子供たちの多様性を踏まえた個に応じた学習過程の充実（科学的根拠に基づく学習の自己調整や学習方法の指導等、学習途中のアセスメントとフィードバック）」が掲げられています。左の調査項目と関連してきます。

